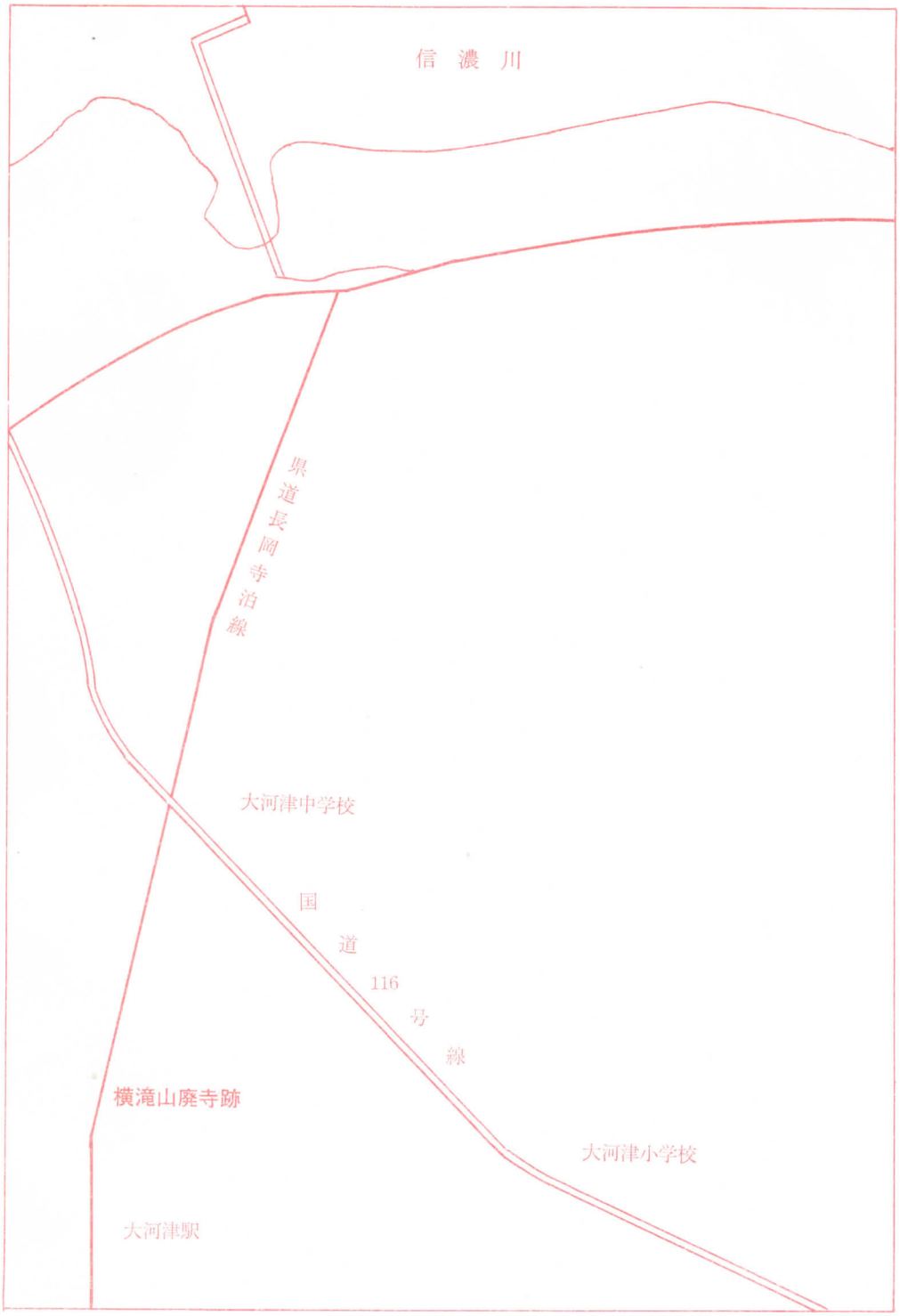
横滝山廃寺跡発掘調査概報

—昭和59年度—

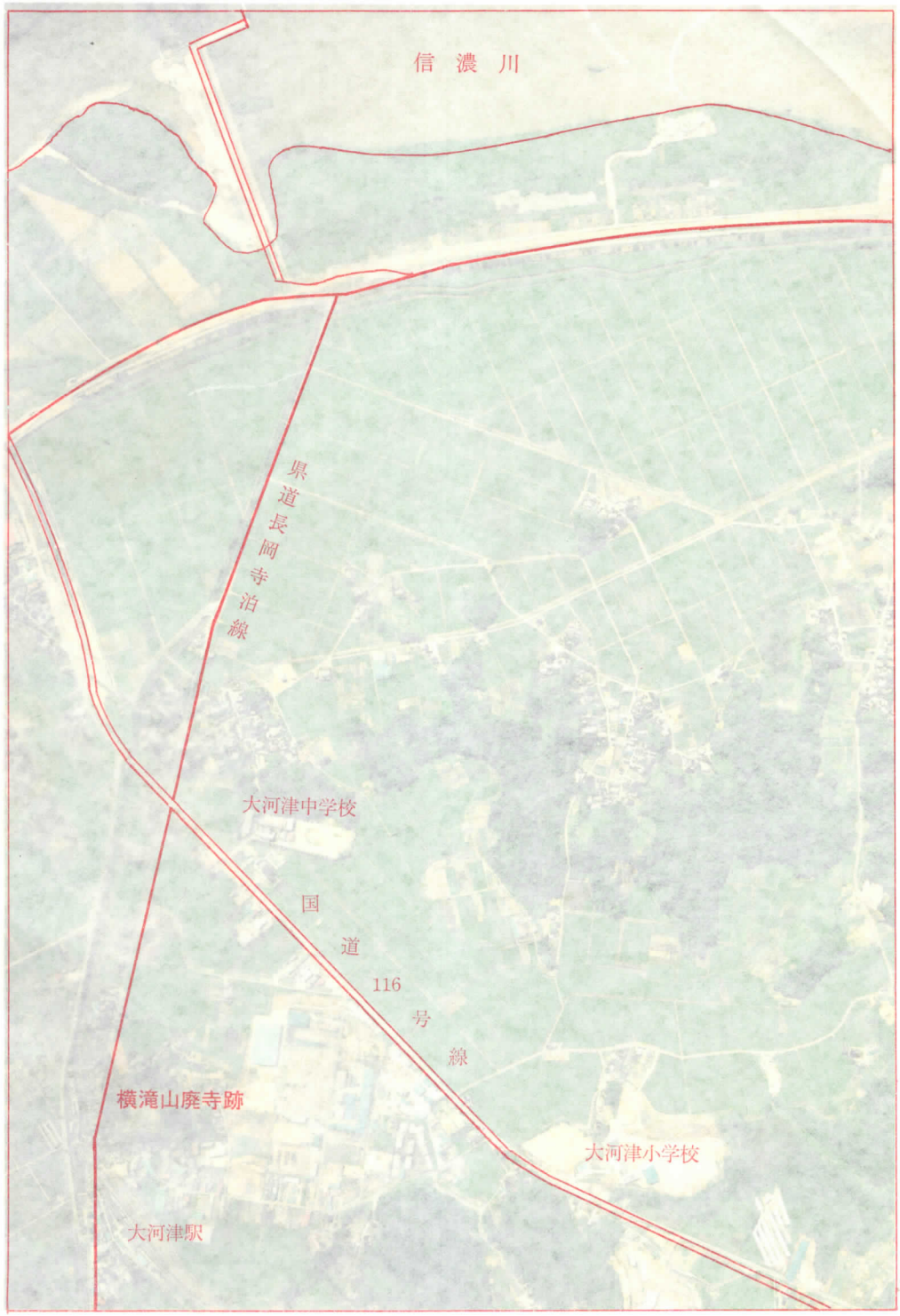
第4次調査

1985

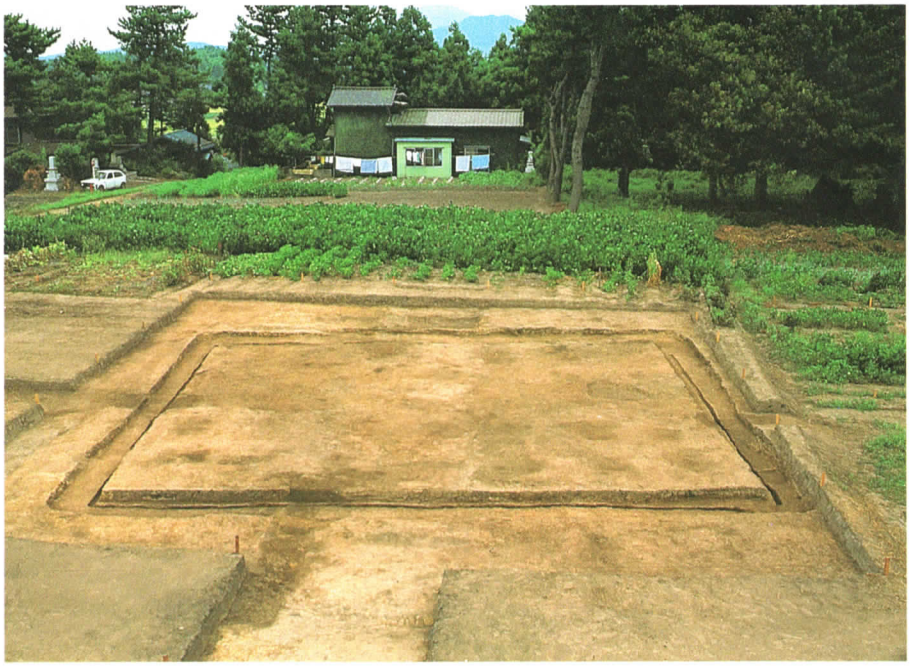
寺泊町教育委員会


信濃川
県道長岡寺泊線
大河津中学校
国道116号線
横滝山廃寺跡
大河津小学校
大河津駅

横滝山廃寺跡と周辺　（航空写真）



横滝山廃寺跡と周辺（航空写真）



SB310 基壇全景（南より北をみる）

SB310 基壇北辺土層断面

SB 310 基　壇　南　辺

序

去年の夏に行われた横滝山廃寺跡の第４次発掘調査が，関係諸氏のご尽力によって大きな成果をおさめ，ここにその概報が刊行されますことに対し，深く敬意を表します。

昭和51年度から第４次にわたり発掘調査が重ねられている横滝山は，寺泊海岸から５km，比高約10mの小高い丘であります。東と西は大正時代までは溜や沼であり，北側は円上寺潟に連なる潟で，南は低い尾根続きであったといわれます。この丘陵上に立つと，北に国上，弥彦の秀峰が指呼の間に望まれ，東には汪洋と流れる信濃川の彼方に，越後平野が果てしなく広がっています。

古来この地はロマンを秘めた聖域とされ，縄文・弥生時代の土器や瓦片等の出土により，先史，古代史をひもとく重要な鍵を握っている霊地とされています。

昭和51年，古寺在所の印として，鴟尾や軒丸瓦等の発見を手掛りに，国，県をはじめ関係各位のご指導ご支援を得ながら初回の発掘調査が行われ，爾来４次にわたって調査が続けられました。

昭和57年の第２次発掘調査では，10世紀ごろと推定される基壇をもった建物跡が検出され，昭和58年の第３次調査では，北陸で稀といわれる塼仏をはじめ，多量の瓦類と共に新たな基壇の一部が確認されました。この時点で，横滝山遺跡は古い寺院跡であることに間違いないという検証が得られたようであります。

宜なるかな，昭和59年３月27日付けで「横滝山廃寺跡　右を新潟県文化財条例に基づき新潟県指定記念物に指定する」の指定書が県教育委員会から交付されました。困難な財政事情の中にあって，３次に及ぶ発掘調査が効を奏し，横滝山遺跡の価値が認められたこの指定は，大きな喜びと誇り，そして新たな勇気を与えてくれました。

そして，これに勢いづいた第４次の発掘調査で，東西約12m，南北約10mの木造基壇外装をもった建物跡の存在が明らかになりました。これが７世紀末から８世紀初頭にかけての金堂跡と推定すると，壮麗な七堂伽藍がこの丘陵に建ち並んでいた当時の偉観が想定されて，新たなロマンをそそられる思いがいたします。

時あたかも寺泊町史の編さん事業が進められています。この地に印した先人の積み重ねの上に，わが町の今日の発展が築かれてきました。この横滝山に秘められた数々の謎の解明が，町史の先史，古代を大きく飾り，その後の変遷に広く拘わりをもつでありましょう。

ここに本書の刊行を祝し，今次調査に寄せられた関係各位のご芳情とご尽力に深甚の謝意を表する次第であります。

昭和60年３月

寺泊町長　中　島　甚　一　郎

例　　言

1. 本書は，昭和59年８月16日から９月10日の間実施した，新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝（崎）山所在遺跡の第４次発掘調査の概要である。表題は，文化財保存事業としての申請書題名によった。
2. 本発掘調査事業は，新潟県三島郡寺泊町（町長中島甚一郎）に対する文化庁・新潟県教育委員会の昭和59年度文化財保存事業として行われたもので，寺泊町教育委員会（教育長廣田廣四）が実施したものである。
3. 本事業は，発掘調査会（会長中島甚一郎）を組織し，寺泊町および発掘調査会が発掘調査団（団長寺村光晴）に委嘱して行った。関係者・参加者は後記の通りである。
4. 本書は，次の諸氏により分担執筆されたものを，調査団長寺村光晴がとりまとめ，編集した。編集には前島己基，千家和比古の尽力があった。

   Ⅰ　千家和比古

   Ⅱ　駒見和夫

   Ⅲ　（１）　寺村光晴　　（２）　上野邦一

   Ⅳ　前島己基

   Ⅴ　寺村光晴

   挿図は上野邦一，前島己基，駒見和夫が作製した。なお，挿図の方位は真北で示した。

   用語，用字は各執筆者にしたがい，あえて統一していない。
5. 本発掘調査には，各方面から公私にわたり物心両面の多大なご援助を頂いた。ご芳名は，できるだけ記させて頂いたつもりである。もし，失礼があったならお許し頂きたい。ここに衷心より深く御礼を申し上げる次第である。

目　　次

口　絵　Ⅰ　横滝山廃寺跡と周辺（航空写真）
Ⅱ　ＳＢ310基壇全景
Ⅲ　ＳＢ310基壇北辺土層断面
Ⅳ　ＳＢ310基壇南辺

序　寺泊町長　中島甚一郎

例　言

Ⅰ　遺跡の立地と環境……1

Ⅱ　発掘調査の経過……3

（１）　既往の調査……3

（２）　第３次調査……3

（３）　今次調査の経過……3

Ⅲ　調査の概要……6

（１）　遺跡の概観と調査方法……6

（２）　遺　構……7

Ⅳ　出土の遺物……11

（１）　瓦　類……11

（２）　土器その他……12

Ⅴ　結　語……13

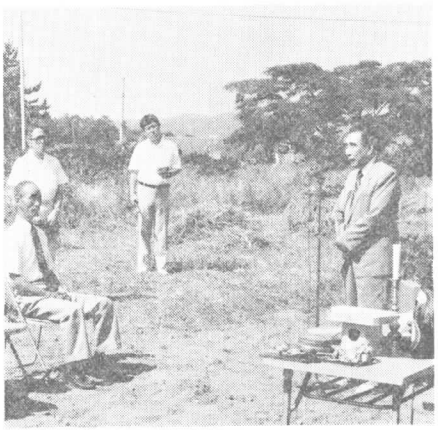
あ と が き　寺泊町教育委員会教育長　廣　田　廣　四

挿　図　目　次

第１図　横滝山遺跡付近地形図…… 2
第２図　地形測量図…… 4
第３図　発掘調査遺構図…… 8
第４図　基壇東辺部（左）・西辺部（右）土層断面図 …… 9
第５図　作業過程図…… 9
第６図　基壇外装模式図……10
第７図　瓦拓影……11
第８図　土器・石器実測図……12

図　版　目　次

図版第一　１）横滝山遠景（東側より）　２）ＳＢ310基壇全景（南側より）
図版第二　１）ＳＢ310基壇全景（北側より）　２）ＳＢ310基壇全景（西側より）
図版第三　１）ＳＢ310基壇全景（北東側より）　２）ＳＢ310基壇全景（南西側より）
図版第四　１）ＳＢ310・基壇東辺　２）基壇東辺部土層断面
図版第五　１）ＳＢ310・基壇西辺　２）基壇西辺部土層断面
図版第六　１）ＳＢ310・基壇南辺　２）基壇南辺部土層断面
図版第七　１）ＳＢ310・基壇北辺　２）基壇北辺部土層断面
図版第八　平瓦，丸瓦



鍬入れ式（中島甚一郎町長挨拶）

I　遺跡の立地と環境

横滝山遺跡は，新潟県三島郡寺泊町大字竹森，通称横滝(崎)山に所在する。

この地は南北に細長い新潟県のほぼ中央―中越地方―の海側にあたり，付近の地形は，およそ，第三系の東頸城丘陵と信濃川沖積地によって構成されている。妙高南麓より北走する東頸城丘陵は雁行する数条の小支丘に分かれ，中越地方では柏崎平野北端から海岸線沿いに北上して信濃川分水路を越え弥彦角田山塊を形成する西山丘陵と，これに併走する柏崎平野南縁に発して分水路直前まで連なる前山丘陵とになる。前山丘陵の東側は丘陵裾沿いに信濃川が北流し，その中・下流に広大な越後平野を展開させている。本遺跡はこの越後平野南部の平野（中越平野）に突出した前山丘陵の北端，現在独立小丘状の地に位置するものである。信濃川は前山丘陵北端付近で北東に大きく屈折蛇行し，本遺跡下の北部低地はその蛇行部の攻撃斜面に相当している。また，遺跡の西側には西山丘陵との間に島崎川断層谷がある。ここを流れる島崎川は，江戸期には旧円浄寺潟に注いでいたと考えられるが，今日潟はなく細長い沖積地を展開させている。すなわち，この地一帯は大規模な氾濫原で，湛水の害の大きかったことが諸記録からも窺われる。従って，遺跡の周辺は現在では埋立て干拓されているものの，往時は南西側を除き自然堤防と後背湿地，潟湖から構成されていたもので，集落は現在も自然堤防上に発達している。このように遺跡の周辺一帯は信濃川による洪涵地であったが，その排水路が遺跡の北を西流する，明治42年起工，大正12年通水の大河津分水（新信濃川）である。これにより湛水田の乾田化も果され，今日この付近は中越米の主産地帯となっている。

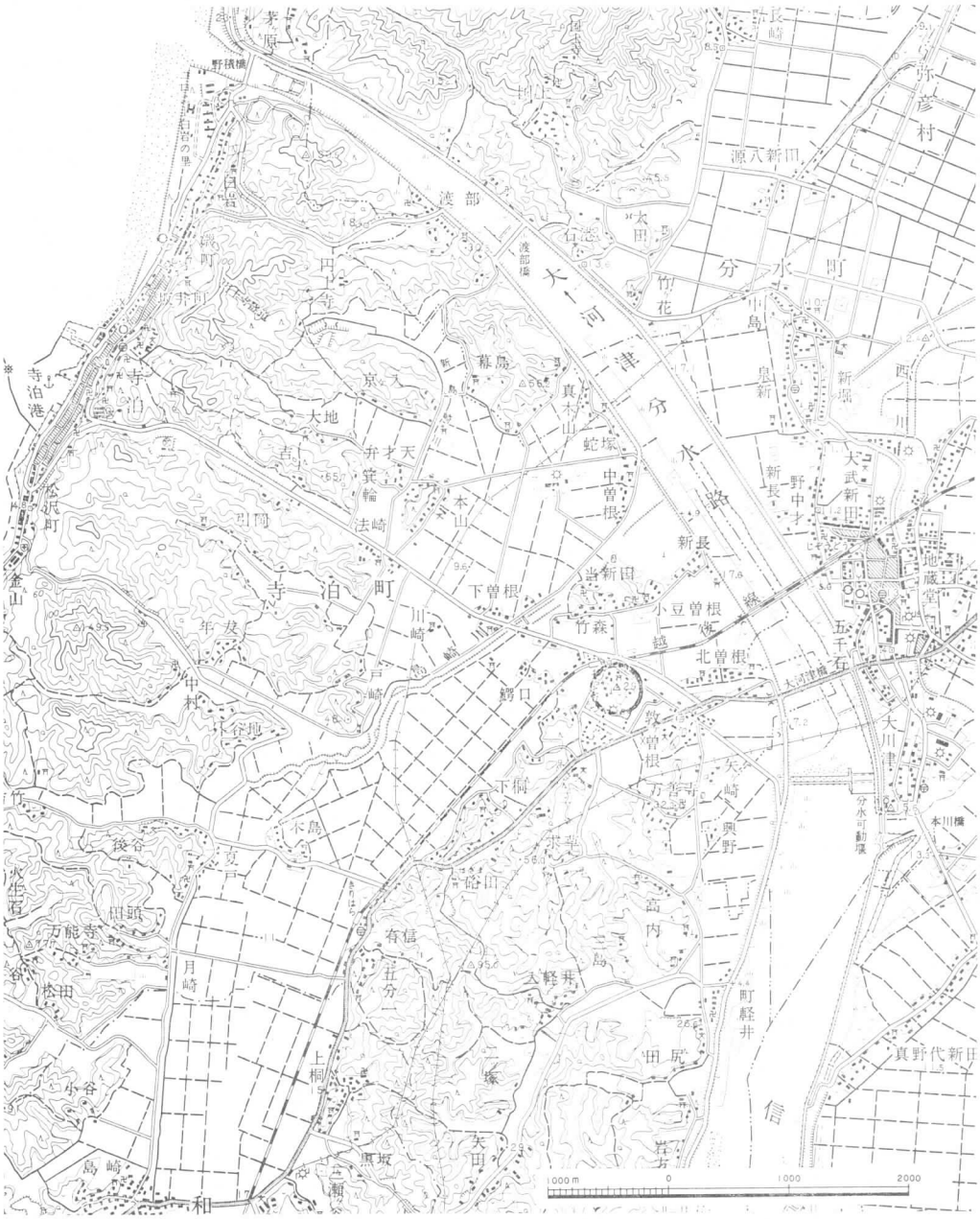
以上のような環境の下，本遺跡周辺には縄文時代から歴史時代にわたる遺跡が少なからず存在している。これらについては，すでに既報の中で縄文，弥生時代の遺跡は旧円浄寺潟周辺の丘陵上および潟畔に，土師器・須恵器および歴史時代の遺跡は自然堤防乃至微高地状の低地に位置しているという傾向が指摘されている。ところで，本遺跡と深く関る遺跡として須恵器・瓦の窯跡が求められるが，既報の中では以下のものが注意されていた。

1. 寺泊町大字大池字小丸山　弁財天窯跡
2. 寺泊町大字夏戸字中村　　夏戸窯跡
3. 和島村大字北野字中道　　中道窯跡
4. 和島村大字小島谷　旧北辰中学校々庭（瓦窯跡）

そこで，今次の調査ではこのうち弁財天，夏戸の各窯跡の確認調査を，それぞれ指摘された地点において実施した。弁財天窯跡とされている地では水田に面した緩傾斜の畑地に須恵器数片を表採出来たが，ここに「窯跡」の痕跡はなく，その存在を確認するまでには至っていない。また，夏戸窯跡と称するのは山の斜面に階段状の地業をした休耕田の地と目されたが，ここでは耕作面下及び切削面から多量のスラグを検出，近世タタラ跡を確認したにとどまる。すなわ

ち，弁財天窯跡，夏戸窯跡は，『遺跡地図』に記録され指摘されている地点と探索地点とに齟齬がないかぎり，須恵器，瓦に関わる生産遺跡としては不確定であるとしなければならない。

（千家和比古）



第1図　横滝山遺跡付近地形図（○横滝山遺跡）

Ⅱ 発掘調査の経過

（1）既往の調査

横滝山は江戸時代より注目され，明治以降も古墳に比定されるなど，常に古蹟として関心の対象になってきた。以上のことについては，すでに『横滝山廃寺跡発掘調査概報—昭和51年度調査—』（昭和52年３月，寺泊町教育委員会）のなかに記述されているので，ここでは省略したい。

今次調査は，本遺跡から採集された軒丸瓦，鴟尾，「寺」字墨書土器等の採集遺物に端を発した昭和51年８月の第１次調査，昭和57年８月の第２次調査，および昭和58年８月の第３次調査に次ぐものである。第２次調査，第３次調査の経緯については，すでに『昭和57年度調査概報』と『昭和58年度調査概報』があり，第３次調査に関しては下記にも記載している。また，昭和50年８月に新潟県教育委員会が実施した三島郡海岸地域文化財総合調査の報告書が『新潟県文化財調査年報第16，寺泊・出雲崎』（昭和52年３月刊）として刊行され，このなかに若干の関連記事があり，すでに『昭和57年度調査概報』のなかに紹介している。

（2）第３次調査

第３次調査は，これまで調査されていなかった横滝山台地の中央部と南部を中心に発掘し，以前の調査で出土した鴟尾や瓦等を伴う遺構の検出を主目的とした。調査は昭和58年８月18日から９月６日にかけて実施した。この調査では，トレンチ内での検出であったが，木造基壇外装をもつ瓦葺の礎石建物の一部と推定されるＳＢ310と，礎石抜き取り穴と思われるＳＫ303が検出され，付近に礎石を有する建物の存在が想定された。また遺物では，新たに軒平瓦と塼仏が出土し，本遺跡において本格的な寺院が存在していたことが明確となった。こういったことから，本遺跡の重要性が一段と高まるとともに規模，性格をさらに究明すべく次期調査への期待が高まったのである。

（3）今次調査の経過

本遺跡には，瓦・鴟尾等の遺物が出土していたが，それに伴う確実な遺構は検出されていなかった。昭和58年度の第３次調査で，木造基壇外装をもつ建物の一部と推定される遺構（ＳＢ310）が検出された。そこで今回は，ＳＢ310の全容を把握し，本遺跡の性格をより一層明らかにすることを目的として実施した。

発掘調査は，昭和59年８月16日から９月10日まで，実質20日間にわたって行った。

８月16日　午後，現地に集合。町教育委員会・調査会・調査団と，現地で打ち合せを行う。

８月17日　午前９時，現地において中島甚一郎町長，地元関係者並びに廣田廣四教育長，教育委員会関係者，地主，調査団，与板高等学校寺泊分校生徒等が参列して，仏式による

第２図　地形測量図（斜線は第４次調査のＳＢ310）

地鎮祭を行う。

つづいて，昨日の打ち合せ会議で検討しておいた，基壇状遺構のＳＢ310の存在が予想される地点を中心に，東西21m，南北21mの発掘区を設定し，グリッド法を併用したトレンチ法で発掘をはじめる。

8月18～21日　前回の調査で検出した基壇の南北両外郭の一部を手がかりとして，発掘区全体を掘り下げ，基壇外郭のプランの検出を行う。この際，基壇の周囲に，幅約70cmから１mの溝が全周していることが判明した。

8月22～26日　基壇外郭の検出を行う。また，基壇の東西南北の各辺にサブトレンチを設け，基壇外周の溝の性格と，基壇の構築状態を調べる。一方，これに併行して，基壇上面の遺構検出に努めたが，礎石痕等は存在しなかった。

26日には，主要部分の発掘が終了したので，与板高等学校寺泊分校の生徒諸君は現場を去った。期間中，本地域には１ヵ月以上もほとんど雨が降っていなかったため，地面は大変乾燥し，岩のように固くなり，かつ土質の区別が明瞭でないという，きわめて発掘には困難な状況であった。しかし，土と汗にまみれて積極的に調査に取り組んでくれた高校生諸君の姿は，我々調査団員にとって大きな感激と励みとなった。

8月27日　発掘区を清掃した後，遺構及び全景の写真撮影を行う。

8月28日　遣り方測量により，発掘区の測量を行う。

8月29日　現地説明会。中島甚一郎町長，地元関係者，多数の町民，さらには広く新潟県内各地の研究者や遺跡に関心をもつ方々，またマスコミ関係者等約200人が来跡され，本遺跡に対する深い関心のたかまりと熱気が感じられた。

8月30日　調査団を二手に分け，測量の継続と，窯跡を中心とする周辺遺跡の調査を実施する。

9月６～10日　山添組により埋め戻しを行う。埋め戻しはこれまでの調査と同様に，遺構の保存を予想し，浜砂を発掘区全面に敷く。本日をもって，すべての作業を終了する。

調査期間中，県内各地から多数の方々が見学に来跡され，本遺跡に対する関心の高さを改めて痛感させられた。また，炎天下，与板高等学校寺泊分校生徒諸君や，多数の地元の方々から積極的な応援を得た。発掘調査が順調にすすめられ，多大な成果を得ることができたのも，一にこれらの方々の御協力の賜であった。心から感謝の意を表したい。　　（駒見和夫）

Ⅲ 調 査 の 概 要

（1）遺跡の概観と調査方法

遺跡の概要については，すでに第１次調査の概報である『昭和51年度調査』の中に記しておいた。しかし，本調査に関連するところが若干あるので，一部を摘記し追記しておきたい。

遺跡は，東西約150m，南北約200mで，比高約10mの丘陵上にある。丘陵上はほぼ平坦で台地状となり，ほとんど畑地となっているが，北端部と南西部が山林である。中央部は，現地表面下約15～20cmで地山層に達する。

発掘調査前の観察によれば，この丘陵台地の北縁部（現在は共有地，山林）一帯から瓦片が多く採集され，北西縁部および南西縁部からも採集されていたという。かつては台地全面にわたり瓦片が採集されたというが，現在は少ない。台地上がほとんど畑として耕作されているので，耕作時出土の瓦片が台地の周辺に捨てられたのではないかと思われる。また，台地上より運び出されたという礎石が，大正年代の記録に６個ある。現在その所在が確かめられるのは，竹森神社前の１個のみであるが，これは長径1.5m，厚さ20～30cmの砂岩質である。発見時の状態および原位置については，古いころであるので判明していない。ただ，最近台地東麓の小田吉松氏宅の宅地造成に際して，崖よりころがり落ちたというのが２個あり，出土状態の一端を知ることができる。

なお，台地の西側，ことにその北半部は縄文時代晩期の遺跡で，診療所裏の崖崩壊の際も多数の遺物が出土したという。また，その南側から弥生式土器片を採集している。台地の東縁付近は第１次調査時に古式土師器が発掘され，溝状の遺構の一部を検出しているので，方形周溝墓等の存在の疑いが濃い。台地の南側は，第１次調査において発掘の対象となった塚状遺構の舞台塚があり，古くから古墳と称されてきたものである。墳頂部には石塔がある。数年前までは墳裾にあり，旧道の道標となっていたものという。さらに，その南に直径６m，高さ1.33mの塚状のものがあり，庚塚と称されていたが，現在は形状を損ね旧状をしのぶことができない。以上については，風間正太郎『桐原石部神社並神陵考』（大正４年），星岩治発行『桐原御神陵誌』（大正４年），寺村光晴・久我勇『寺泊のおいたち』（昭和35年）等に詳しい記述がある。

第１次の発掘調査は，台地のほぼ中央北よりに基準杭（ＢＭ１）を設け，ＢＭ１より真南82.9mと113mにも基準杭を設け，それぞれＢＭ２，ＢＭ３とした。ＢＭ１をＤＫ50とし，この南北基線（磁針方位は西偏約7°0′）を中心として，台地全体に３×３mのグリッドを設定し，このグリッドを併用して発掘区を設けた。なお，各単位グリッド（３×３m）は，アルファベット２文字と，２桁の数字の組み合せによって呼ぶこととし，基線を50とし，東へ49．48．47……，西へ51．52．53……とし，それに直交する南北方向は，遺跡中央部をＤＡとし，北へＤＢ．ＤＤ……ＤＴ，南へＣＴ，ＣＳ，ＣＲ……ＣＡと，60mごとに，上位のアルファベットを

繰り上げ，あるいは繰り下げることにした。また，３×３ｍの各単位は，その東南隅の交点の名称で呼ぶこととした。たとえば，50ラインとＤＡラインの交点を東南隅に持つ単位はＤＡ50である。

今次の調査は，以上の第１次調査で設定したグリッドを用いて実施した。（寺村光晴）

（２）　遺構

第４次調査では，昨年検出した建物基壇跡を調査した。

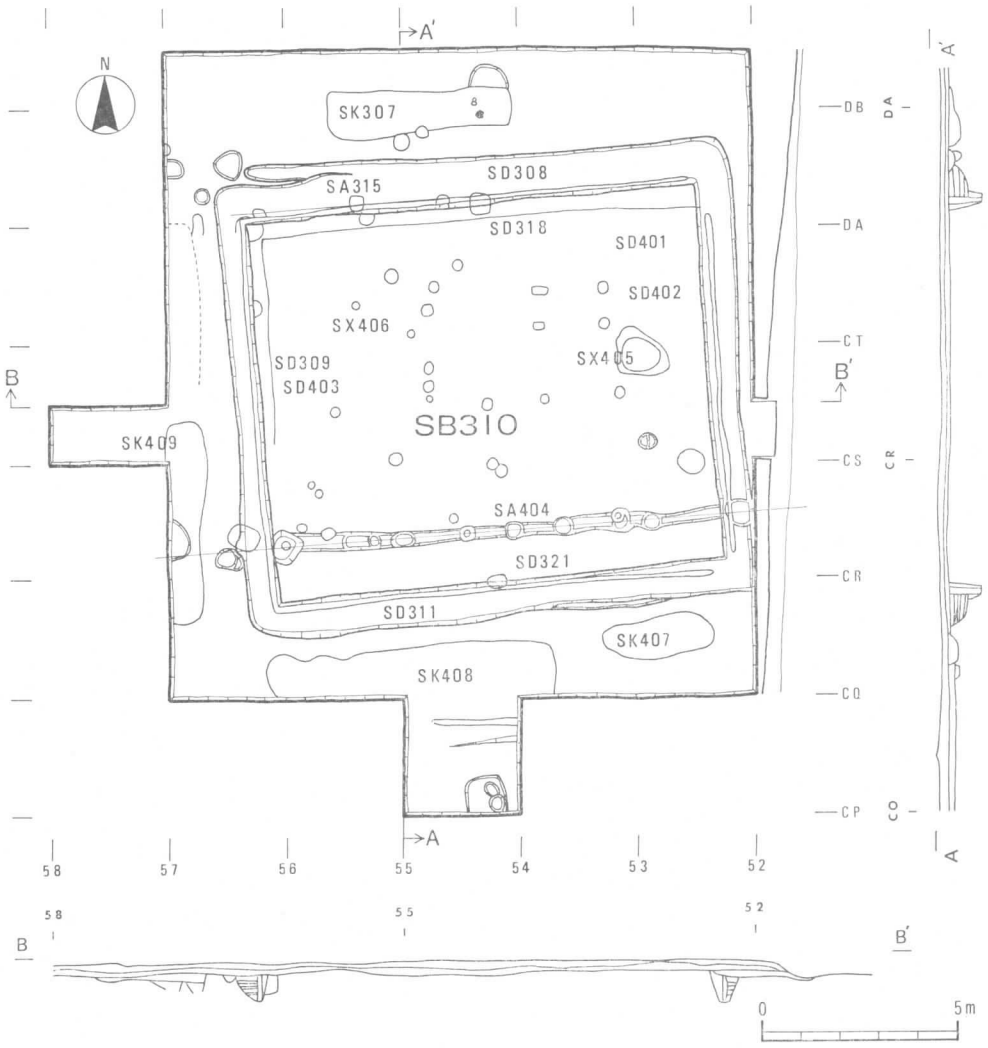
今回の発掘区の中央部54ラインから55ラインの幅３ｍやＣＲ区とＤＡ区は昨年の発掘区に重複している。発掘区は畑地で，土層は上から黒色の表土・床土があり，両者で厚さ25～30cmである。表土・床土を取り除くと黄褐色土の遺構面に達する。昨年検出した溝ＳＤ311，ＳＤ321，ＳＤ308，ＳＤ318，ＳＤ309の延長を検出したのに加えてＳＤ451，ＳＤ402，ＳＤ403を検出した。すなわち昨年の調査で建物基壇の南と北に確認した幅広い溝は基壇を四周することが明白となった。

ＳＤ308・ＳＤ306・ＳＤ311・ＳＤ401の４条の溝は幅80 cmほどで埋土には地山の粘土が混じり，検出した遺構の中では古い。それぞれの溝の内側肩に沿って，幅15cm深さ80cmほどの小溝ＳＤ318，ＳＤ403，ＳＤ321，ＳＤ402がある（第３図）。これらの小溝は地山の黄褐色土が混る土で埋まり，底部では粘土の様相である。これらの小溝は昨年の所見どうり厚板の痕跡と考えられ，幅80cmの溝であるＳＤ308，ＳＤ309，ＳＤ311，ＳＤ401は厚板の掘形と考えられる。これらの溝によってＳＢ310の基壇の規模が確定した。また，基壇は北で西へ5°10′ほど振れている。

基壇というのは，建物の基礎となる高い壇のことで，一級の寺院の建物は，こうした基壇の上に建っていた。今回の調査で確定した横滝山廃寺の建物基壇の規模は，東西約12m，南北約10mで東西にやや長い長方形である。昨年の調査では，この基壇の規模や形状が確定しなかったために，ＳＢ310が仏堂か塔か決めることができなかった。ＳＢ310の基壇の平面の形が長方形であることや，建物の位置が台地のほぼ中央にあることなどから，この建物基壇は寺院の中心建物である金堂と推定される。ただし，これまでに知られている７世紀の一級寺院の金堂に比べるとかなり小さい。

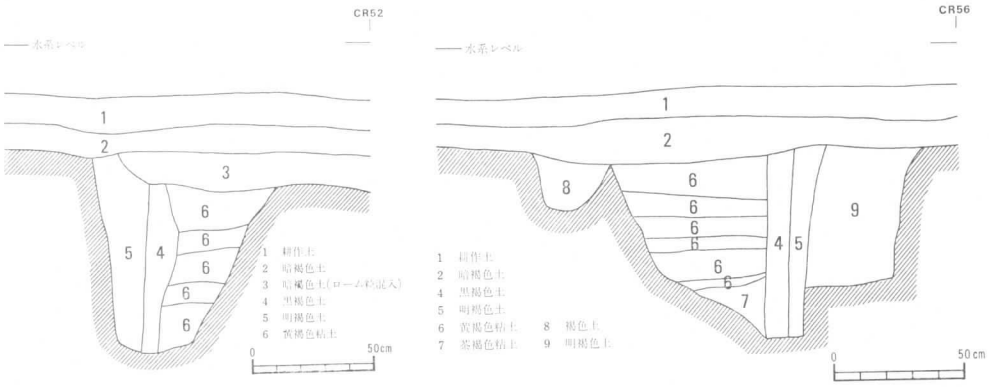
基壇の外側の周囲は，石積や瓦積で外装するのがよく知られているが，横滝山廃寺の金堂は厚板で基壇を取り巻く木造基壇外装であると推定され，類例の少ない遺構である。木造基壇外装と推定した理由は，基壇を四周する深く細長い溝があり，この溝は厚板の跡と考えられ，また厚板を据えるために掘った掘形という作業の跡と考えられる溝が四周するからである。

検出した溝の断面（第４図）を観察すると，基壇は次のように築いていったのであろう。1. まず安定した地盤である地山を切り出すように四周する溝を掘る。この溝は厚板の掘形となる。２．次に基壇の外側に厚板を立てる。なお掘形の断面を見ると内側ではほぼ垂直であるのに外側は斜めに落ちている。この断面の形から，厚板を外側にねかせて掘形に入れ，厚板の頭を内



第３図　発掘調査遺構図

側にひっぱり起こして立てたのではないかと考えられる。板を立てたあとに板の内外を埋め突き固める。３．そして厚板の内側で地山面から上に土を突き固めながら高さおよそ１ｍほどの壇を築成する。４．厚板は竪板として用いたのであろう。５．金堂の木造基壇外装は，建ってから100年後ほどには大部分が朽ちてしまい，そのまま放置され，そのうち基壇上面は削り取られてしまった。地中に入っていた厚板はとりのこされて，長い年月の間に徐々に腐り，そこに土が混じっていって，粘土の埋土となり溝として残ったものである(第５図)。作業手順を以上のように，厚板を基壇築成に用いた後に基壇外装として整備されたと考えたが，基壇築成だけに用いた可能性もある。

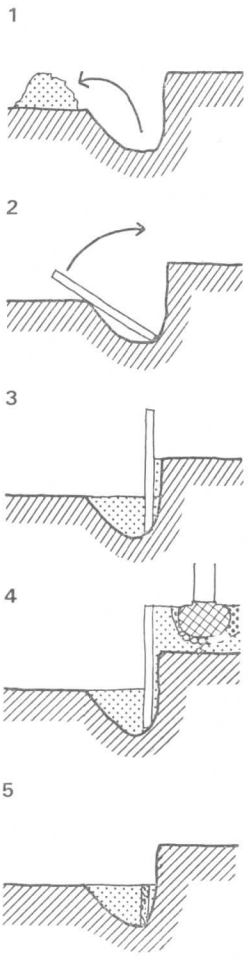


第４図　基壇東辺部（左）・西辺部（右）土層断面図

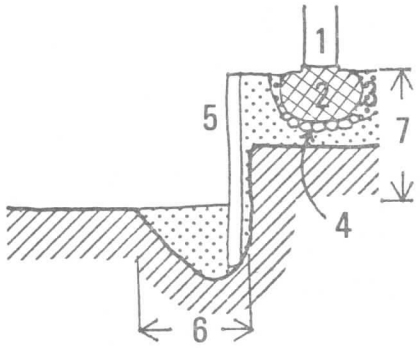
ＳＢ310の基壇の高さが１ｍほどというのは推定である。この金堂は瓦が周辺から出土しているので本瓦葺の建物であろう。礎石の上に柱を建てる礎石建物としても，礎石はもちろん，礎石の跡を示す穴は，検出した基壇の上面では検出していない。礎石と礎石の下の根固め石を考えると，礎石には70～80cmの深さが必要であるので，礎石や根固め石の跡が全くみつからないのは，高さ１ｍほどの基壇があって，基壇上部が削り取られたためと考えられる（第６図）。もしＳＢ310が堀立柱建物としても，柱掘形が全く残らないほど削り取られていることになり，やはり基壇は１ｍほどの高さと推定できる。

木造基壇外装の例はあまり知られていないので，横滝山廃寺の金堂は珍しい一例と言える。木造基壇外装の事例は第３次調査概報で指摘した。すなわち，事例が確認されているのは，時代が下るが12世紀頃の平泉毛越寺南大門・東回廊・鐘楼，嘉祥寺講堂に例がある。毛越寺西回廊・鐘楼も木造基壇外装と推定されている。ただし，平泉の事例は壇上積基壇を木造で築いたもので，横滝山廃寺の木造基壇外装とは様式が異なっている。また，奈良県飛鳥地方には，桧隈寺，稲淵川西遺跡に木造基壇外装と推定ができる例があるが，確実な例ではない。鎌倉永福寺（注１）も木造基壇である。

基壇の規模や当時の金堂の標準的な平面を参考にすると，横滝山廃寺金堂は桁行（東西）５間，梁行(南北)４間の建物



第５図　作業過程図



1. 柱　2. 礎石　3. 礎石掘付穴
4. 根固め石　5. 厚板　6. 厚板の掘形
7. 基壇

第6図　基壇外装模式図

と推定することができる。柱間が7尺等間とすれば，基壇の出は1mほどになる。基壇のやや外側に雨落溝を想定すれば軒の出は 1.2 mほどが推定される。軒の出が浅いので三手先組物は考えにくくなる。組物というのは，柱の上に肘木や斗を組み上げてせり出し，軒を支える構造のことで，一級寺院の金堂・塔は三手先組物を用いている。規模が小さく，軒が浅いことを考えあわせると，横滝山廃寺金堂は，単層と考える方が妥当である。なお，基壇上の東側の一つの穴ＳＸ405が，礎石の位置を示すものとすれば，この建物は梁行3間となる可能性がある。

今回の調査では，基壇の規模が確定し，厚板による木造基壇外装であることがわかった。しかし，建物の平面や木造基壇外装の細かい点は不明のままである。例えば，建物の柱間や，厚板をどうやって固定したのか，厚板の上端の処理などや階段の様子はわからないままである。建物本体の形状や構造も現状では推定の段階である。

木造基壇外装は雨・雪に対して弱く，どれほど長期間有効なのか疑問があり，従って長期の存在を願うと考える寺院の，しかも伽藍中枢部の建物の基壇外装としては木造基壇外装は不適切である。木造基壇外装が遺構として確認できる事例が増え，木造基壇外装の存在やその特徴の解明は今後の課題と言えよう。

基壇跡の上面では，性格不明の小穴（ＳＸ406など）を多く検出した。時期が不明で建物の造営に関連するかどうかは明らかではない。建物を築き上げる際の足場の穴という可能性もあるが決めがたい。

基壇南端近くの東西柱穴列ＳＡ404は，建物廃絶後に基壇を横切るように設けられた柵であろう。基壇の南・北・西にはＳＫ407，ＳＫ408，ＳＫ409，ＳＫ307などの長円形の土壙を掘っている。これらの土壙は基壇を避けるように掘っているとも考えられ，そうすれば土壙を掘った時期まで基壇は土壇として残っていたのではあるまいか。土壙や柵は，寺院廃絶後の横滝山の歴史を知る手掛りであるが，それらの遺構の性格や時期は不明な点が多い。（上野邦一）

注1　「廃寺　勝長寿院と永福寺」『鎌倉市史』　社寺編　昭和34年10月

Ⅳ 出土の遺物

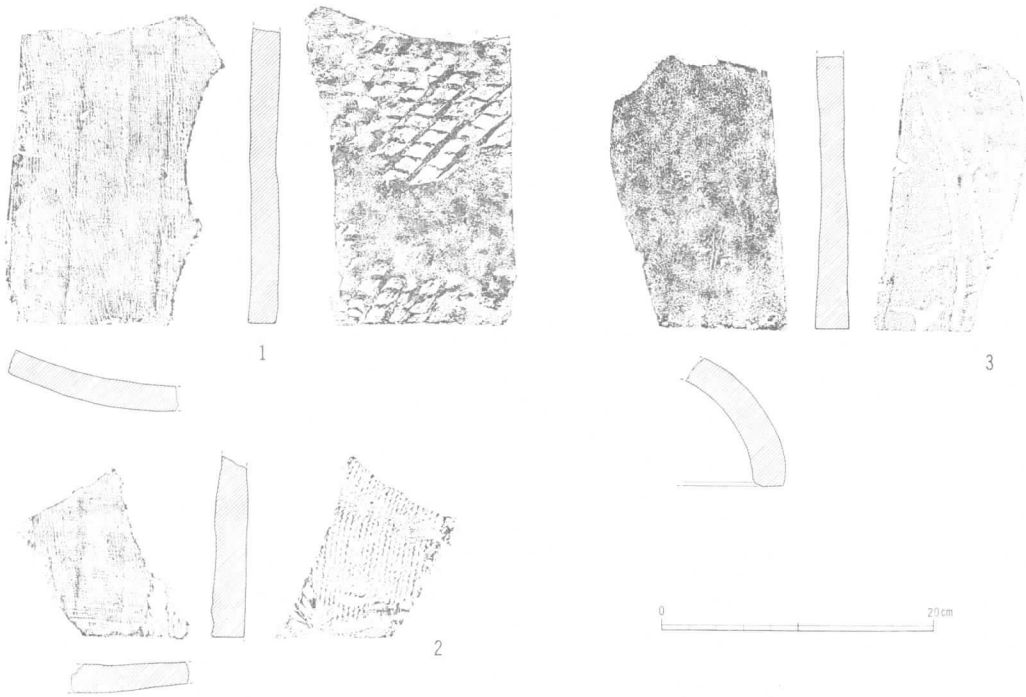
今次調査で得られた遺物には，瓦片のほか須恵器，土師器，縄文土器，石器，金属器等があるが，既往の調査に比べ発掘面積が少ないこともあって，その量は僅少である。また遺構面が非常に浅く，後世の耕作などにより削平，攪乱され，遺物の大半は小さく破砕し，遺構に密着した良好な出土状態を示すものもほとんどみられなかった。新知見に乏しいが，以下，今次調査で出土した遺物の概要を述べる。

（1） 瓦類（第7図，図版第八）

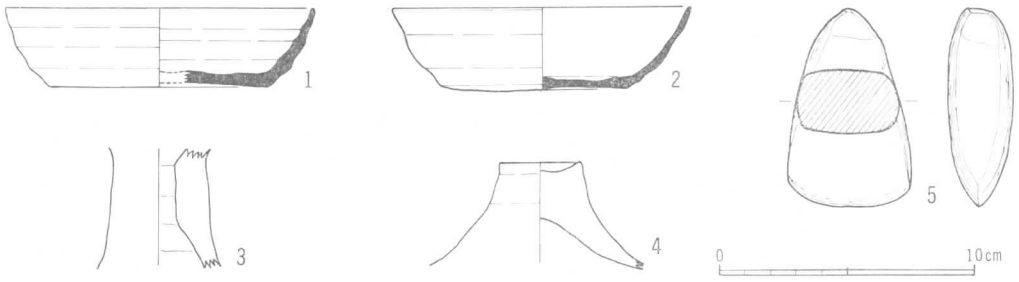
瓦当や道具瓦の出土はなかったが，平瓦と丸瓦の破片が発掘区のほぼ全域から出土している。平・丸瓦とも成形，調成技法などこれまでの調査で確認されているものと，全く同じである。

1）平　瓦

完形をうかがうものはないが，すべて粘土板桶巻作りにより成形し，三～四分割して仕上げたものである。凹面（外面）に例外なく，幅3.5～3.7cmないし5.0cm前後の模骨痕を残す。



第7図　瓦拓影（1．2平瓦　　3　丸瓦）



第８図　土器・石器実測図（１．２須恵器　３．４土師器）

桶抜きを容易にするため模骨にかぶせた布袋は，凹面に残る布目の圧痕から３cmの単位面積中における経糸と緯糸の本数に24～27本×26～27本の比較的粗いA類と，25～27本×34～36本で緯糸が密なB類の二種があり，B類が大半を占めることは，これまでの知見とかわらない。凸面（裏面）には第２次成形として斜格子の線刻叩きと縄巻板による叩きの二種をみる。従来どおり，前者の刻線叩き目をとどめるものが圧倒的に多い。図の１は，凸面をⅡ類の斜格子刻線入り叩板で叩き締め，凹面にB類の布目痕を残すもの（CQ53グリッド出土），２はまれにみる凸面に縄叩き目をとどめるもの（CRグリッド出土）である。

２）丸　瓦

平瓦に比べ出土量は，きわめて少ない。すべて玉縁のない，いわゆる行基式で，３（CT53グリッド出土）に示すように，凹面（裏面）には大半，B類の細かい布目痕をとどめ，凸面（外面）は丁寧な縦位のヘラケズリとナデ調整により，第二次成形の叩き痕をきれいに消し去っている。

（２）　土器その他（第８図）

出土した土器には古墳時代から平安時代の須恵器と土師器，および縄文土器がある。しかし，いずれも小片で器形のおおかたがうかがえるのは，第８図に示した須恵器杯のほか，わずか数点にすぎない。１はSB310の基壇外周をめぐる化粧板埋設溝の北溝西方（SR53グリッド）から出土した須恵器の小形杯である。口径12.2cm，器高3.15cm。体部はほぼ直線的にひらき，底部にヘラ切り痕を残す。２は須恵器の小形杯で，SB310の化粧板埋設溝の南溝外辺（SP52グリッド）から出土し，口径11.7cm，器高7.3cm。１より径高指数が高く，薄い作りで，体部はゆるく内彎し，底部に回転ヘラ切り痕を残す。１より新しく，本遺跡で最も多くみられる九世紀中頃を前後する時期のものと考えられる。３は古式土師器の器台形土器の筒部，４はつまみのつく蓋形土器の破片である。なお，図示しなかったが，縄文土器には晩期後半の小片若干がある。

ところで，北陸地方では供膳形態をとる歴史時代の土器について，九世紀中頃らか大きな変化があらわれ，九世紀後半には須恵器に対し，土師器の占有率が急増することが知られている。

そして製作手法の点でも杯類の底部にみる糸切り技法が，九世紀中頃以降，これまでのヘラ切り技法を完全に圧倒していくことが指摘されている。これに関連して，ＳＢ310では基壇外装化粧板埋設溝のプラン確認のため，わずかにその上部を掘り下げたにすぎないが，溝内に含まれている土器片は，土師器よりも須恵器の破片が多く，また杯には底部にヘラ切り技法をとどめるものが目立つ傾向にあり，全般的に古い様相を示していることが注意された。

５はＣＳ52グリッドから出土した長さ7.8cm，刃部幅4.9cmの小形磨製石斧。このほか，図示しなかったが，残存長9.5cmで断面７×８cmの角釘（ＣＱ53グリッド出土），長さ10.7cm，断面1.2×1.5cmの方柱状で先端が扁平に尖るタガネ状鉄器（ＣＳ56グリッド出土）などを得ている。（前島己基）

Ⅴ 結　　語

今回の第４次調査は，昭和58年度（第３次）調査において検出されたＳＢ310の木造基壇外装をもつ建物跡と推定された遺構の，規模，内容，性格等を究明するために実施した。調査の結果については，すでに前章までの間に，それぞれが詳細に述べられている。そして，この建物が，既採集・出土の鴟尾，軒丸瓦，軒平瓦，塼仏等に密着する蓋然性のきわめて高いことを示した。今次調査の成果は，以上の点において，建物跡プランの検出とともに，きわめて注目されるものと考えている。

調査は，横滝山の台地全面を発掘したものではなく，わずかな一部にしかすぎない。したがって，台地上における遺構の全貌は，いまだ明らかにされていないといってよい。他にも関連する未知の遺構が，なおも地中に秘められているものと思われる。

横滝山に検出された遺構・遺物は，すでに記述されているように，本地における古代寺院跡の存在を示すものであり，かつ現状における新潟県内最古の廃寺跡と思われる。とすれば，この横滝山廃寺がどのような寺であったかということが，当然次に問題となってくる。この点についても，台地上における全遺構を検出していないので，寺の全構成等についてまでは論じられないが，本報告を含め，既刊の『横滝山廃寺跡発掘調査概報』を基として，爾後検討が加えられてくることになろう。故に，ここでは今後の課題について，一・二ふれておきたい。

まず，ＳＢ310遺構については，さらに詳細な調査が必要とされよう。また，他の遺構との関連が探査されなければならない。後者は前記したように，未知の遺構の存否確認から調査が開始されなければならない。ＳＢ310の性格と位置づけはその結果において，はじめて不動のものとなると考えられる。すなわち，ＳＢ310をめぐり横滝山台地に存在するであろう他の遺構の検出が，今後の重要課題の一つとなるということである。

次に，第４次調査終了後の昭和59年11月３日，藤田治雄，若月正光両氏の苦心の探査により，竹森本村において発見された平瓦，丸瓦がある。横滝山の北方約500ｍの地点である。遺跡の

性格等はまだ判明していないが，これが原位置あるいはそれに近い検出であるとすれば，横滝山廃寺跡出土瓦と同類と思われるので，きわめて注目に価する。すなわち，横滝山をめぐる周辺地域の調査が，横滝山廃寺の性格を示唆し，かつ決定する可能性がきわめて大であるということである。今後は横滝山廃寺跡自体の調査はもちろんのこと，周辺地域の発掘調査が重要な関係をもち，緊急の課題となってくるものと思われる。

これまで行った各年次の調査は，いずれも短期間ではあったが，それぞれの時点で，それぞれに重要な注目すべき成果を挙げてきたものと考えている。しかし，全貌の解明は，上記した諸点からいましばらく俟たなければならない。（寺村光晴）

発掘調査関係者

○発掘調査会

会　長　中島甚一郎（寺泊町長）

副会長　当銀敏雄（寺泊町助役）

同　岡田吉衛（寺泊町教育委員会委員長）

顧　問　三浦佐太夫（寺泊町議会議長）

同　橋本健二（寺泊町議会文教民生委員長）

同　竹内武治（寺泊町議会議員）

専務理事　廣田廣四（寺泊町教育委員会教育長）

理　事　寺村光晴（発掘調査団長），中川成夫（新潟県文化財保護審議会委員），甘粕健（同），家合俊雄（寺泊町収入役），納谷一徳（寺泊町総務課長），小田二三男（竹森区長），山田成一（竹森農区長），横山憲彰（新潟県立与板高等学校寺泊分校教頭），川端公一（寺泊中学校長），小林周作（大河津中学校長），水戸公四郎（寺泊町文化財調査審議会委員長），斎藤一郎（寺泊町文化財調査審議会委員），近藤文夫（同），亀山弘義（同），竹内武（同），吉井日佐男（同），三堀正純（同），山崎龍教（寺泊町社会教育指導員），小林武義（大河津公民館長）

○発掘調査団

団　長　寺村光晴（和洋女子大学教授）

団　員　上野邦一（奈良国立文化財研究所），前島己基（奈良国立博物館），千家和比古（前国学院高等学校教諭），駒見和夫（滑川市立早月中学校教諭），岡田健男（立正大学学生），中山岳彦（同），前谷達也（同），伊沢純一（成城大学学生），

顧　問　中村孝三郎（越後古代文化研究会会長）

参加者　破入武夫，右近光恵，小潟英世

新潟県立与板高等学校寺泊分校生徒

阿部和明，宮村武志，小笠原健一，和田満，八子淳，畑俊之，米山和仁，本合綾子，近藤照美，内山人美，近藤桂子，笠原晴美，山崎陽子，山口多加子，和田立子，八子なおみ，小

林ひろみ，

山添組（山添安次郎）

○発 掘 協 力 者

大字竹森（区長・小田二三男），

地　主　渡辺敏，星　透，山田庄平，深谷昭三，星　繁，星幸喜‘小田泰助

○発掘調査事務局（寺泊町教育委員会）

長井正雄，田中正明，田中正徳

○お世話になった方々

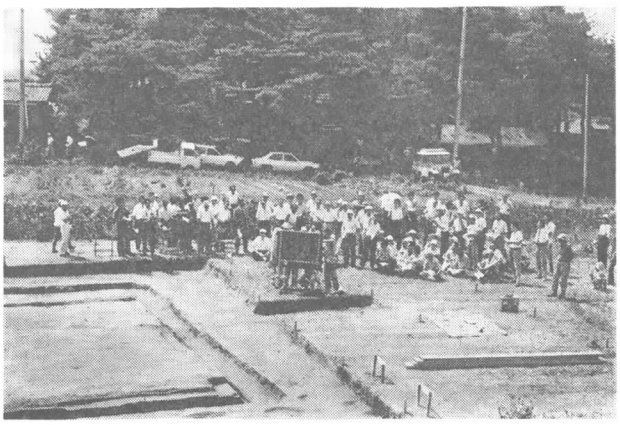
文化庁，新潟県教育委員会，寺泊町，寺泊町教育委員会

小田栄蔵，佐藤義房，山宮哲郎，小田吉松，星幸栄，阿部力，桑野謙次，

三松亭（山田孝平），中川成夫，久我勇，甘粕健，関雅之，中島栄一，伊藤善充，本間信昭，

戸根与八郎，駒形敏郎，折戸靖幸，山崎弥作，内田昭一，若月正光，佐藤雅一

（以上順不同）



現地説明会風景

あ と が き

昭和59年の夏に行われた第４次横滝山廃寺跡の発掘調査は，全国でも稀有な厚板による木造基壇外装をもった基壇が確認され，寺院と推定できる建物が存在したことが検証されるなど，大きな成果を収めることができました。そしてここに，その概報が刊行されましたことに対し，改めて今次調査に寄せられた関係各位のご尽力を称え，深く敬意を表する次第であります。

第４次発掘調査の主なるねらいは，前年の第３次調査で，北陸地方には珍しい塼仏が出土し，基壇の一部分も確認されたので，更に基壇の全容を究明し，白鳳期と推定される古い寺院跡を検証することでありました。

８月17日，耕作者のみなさんから，折角の畑作物の取り入れを早目に切り上げていただき，身を灼くような炎天下に発掘作業が開始されました。

団長の寺村先生，奈良国立文化財研究所の上野先生をはじめ調査団の先生方や大学生，地元高校生，作業員の方々は，横滝山発掘調査作業連続４回目のベテランも多く，炎暑にもめげず効率的な調査活動が進められました。

８月29日には今次発掘調査の現地報告会が開催されましたが，マスコミの事前報道もあって，町内外の本調査に寄せる関心と期待は大きく，参加者も大勢でした。寺村先生の説明される全国でも稀な木造基壇外装の遺構に目を見張り，奈良国立博物館の前島先生の出土品の説明に真剣に耳を傾け，上野先生から横滝山遺跡と古寺のかかわりについて述べられた後，金堂想定図が示されると，会場に一瞬どよめきが起こって，ここに眠る古代史の霊が今甦る思いに浸りました。

御蔭様で第４次発掘調査は成功裡に終りました。この横滝山廃寺跡は，昨年３月27日県教育委員会から新潟県指定記念物の指定を受けましたが，今次調査の成果により，面目躍如の思いがいたします。

横滝山廃寺跡の発掘調査はこれで完了したわけではなく，ここに秘められた全容の究明のためには，まだまだ相当の日時を要するものと思われます。ここに眠る古代史の謎がひとつひとつ解明されて行く過程の中で，古い歴史の寺泊が如実に浮んでくるものと期待されます。

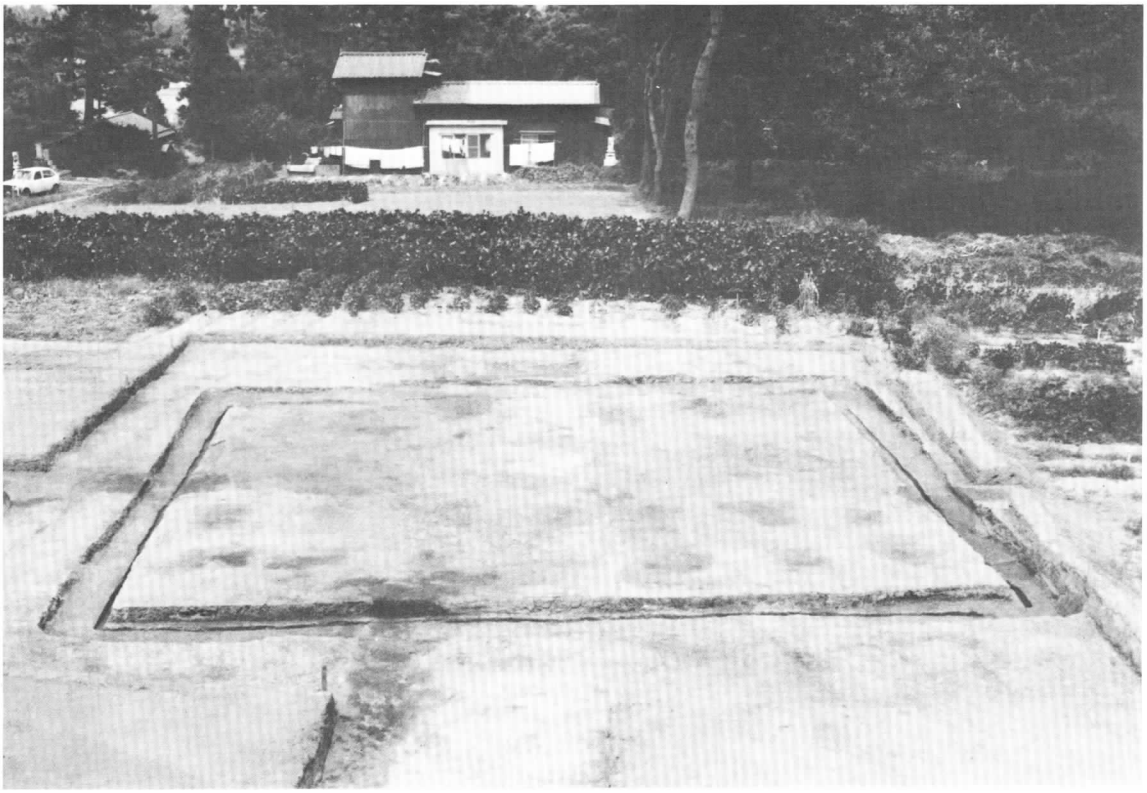
今回の発掘調査にご尽力いただいた関係各位に対し重ねて深くお礼申し上げるとともに，本書が広くわが国古代史の解明に役立つことがあれば幸いと存ずる次第であります。

昭和60年３月

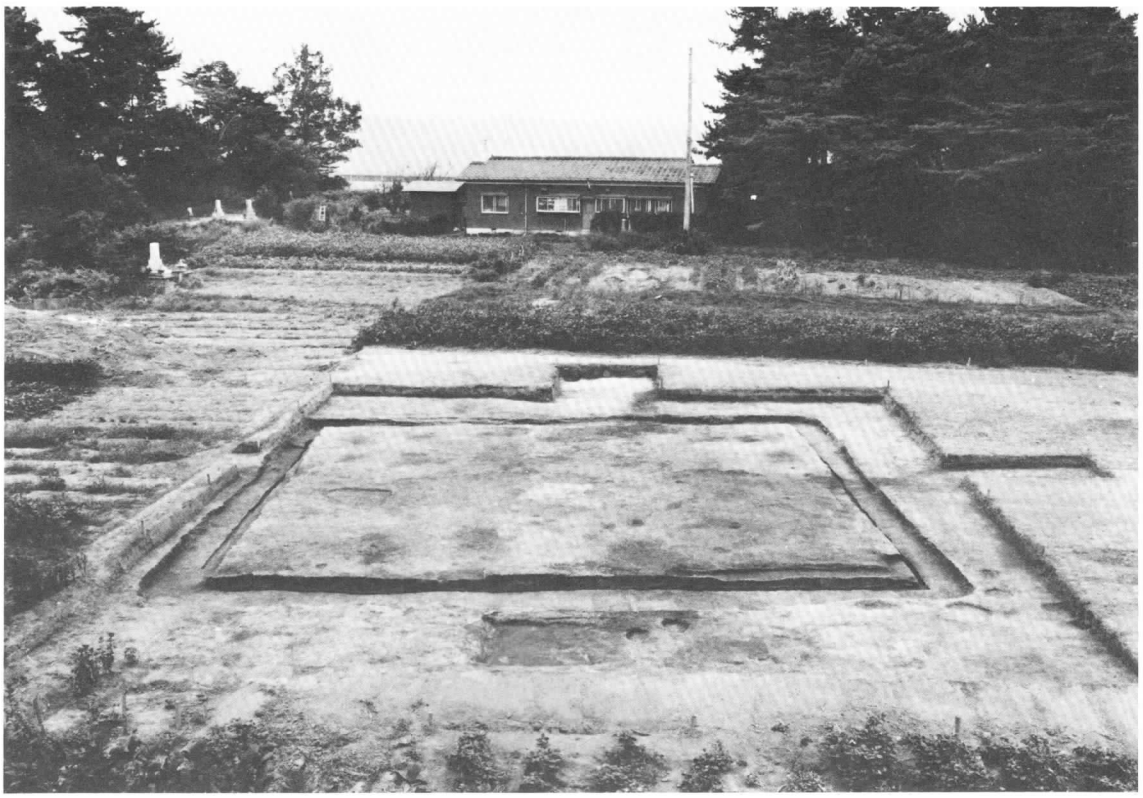
寺泊町教育委員会

教育長　廣　田　廣　四

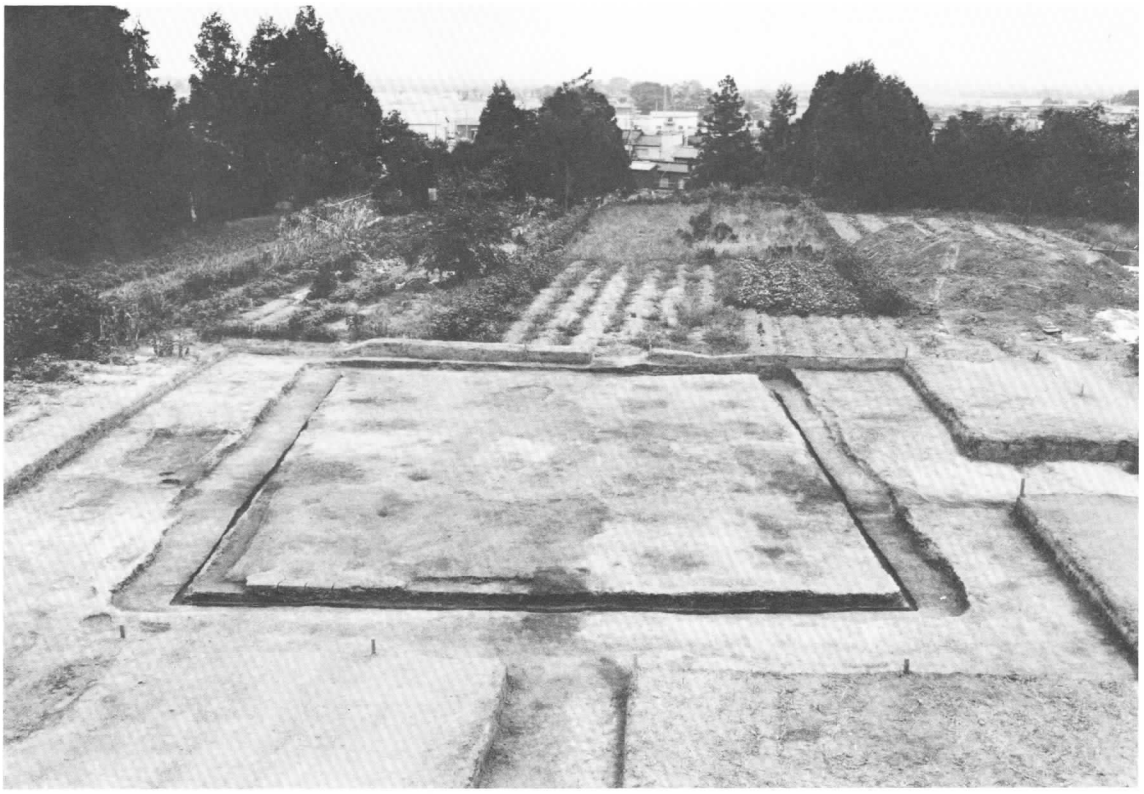
1　横滝山遠景（東側より）



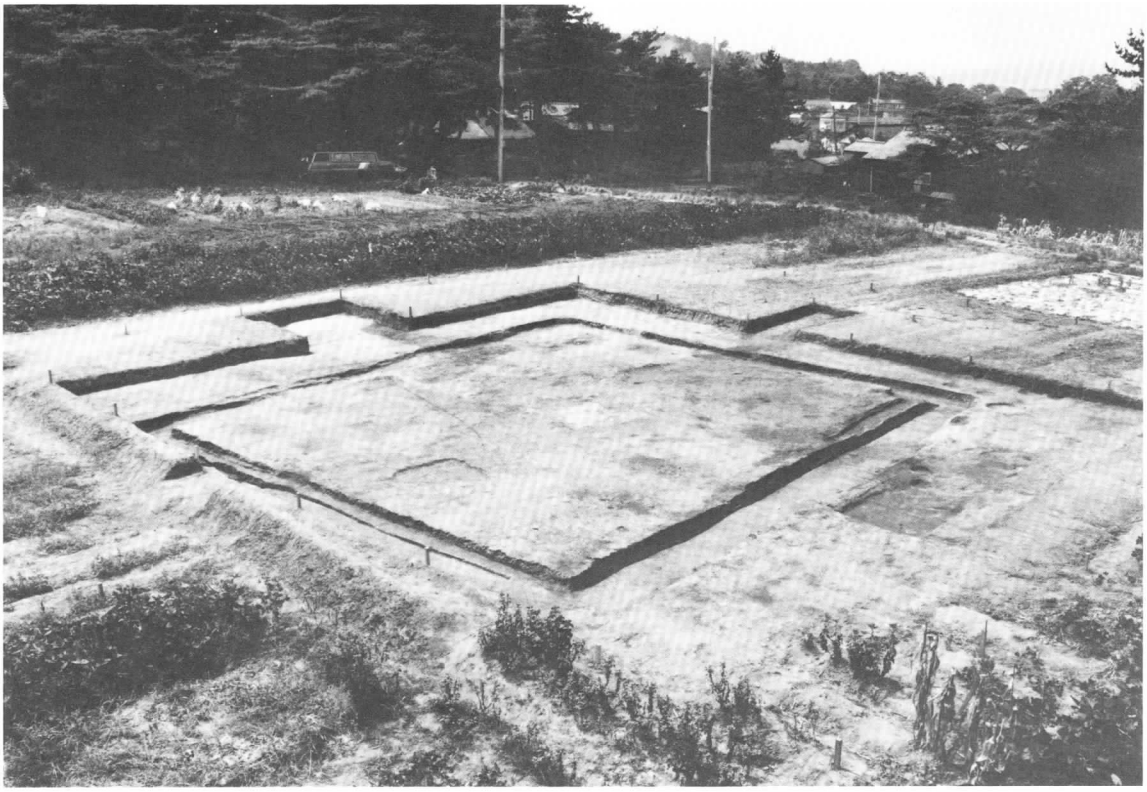
2　SB310基壇全景（南側より）



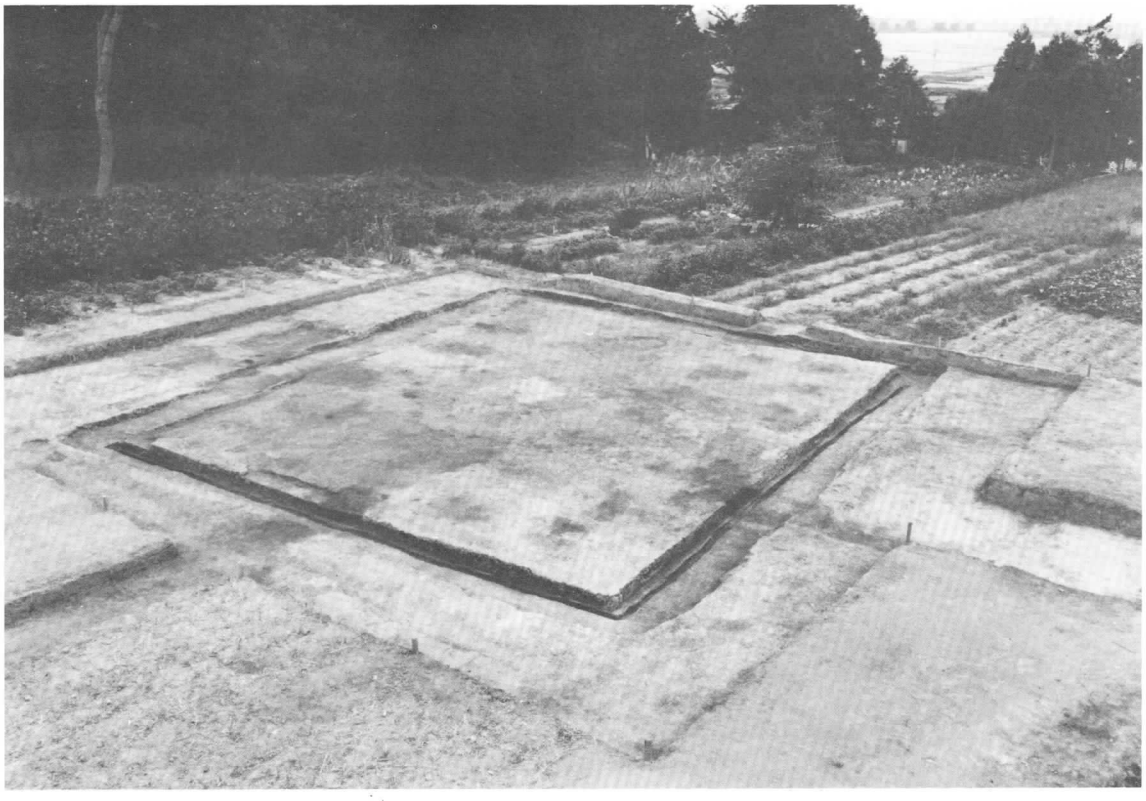
1　ＳＢ310 基　壇　全　景（北側より）



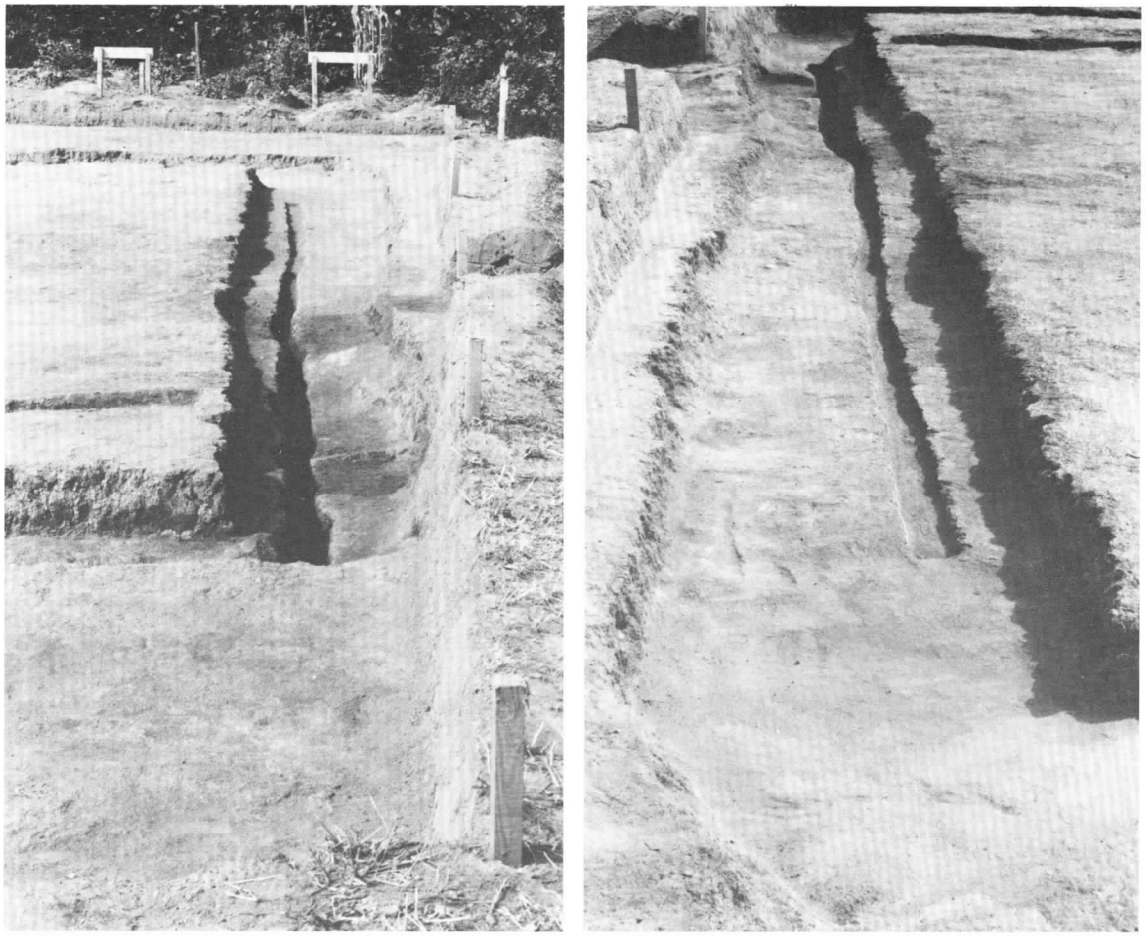
2　ＳＢ310 基　壇　全　景（西側より）



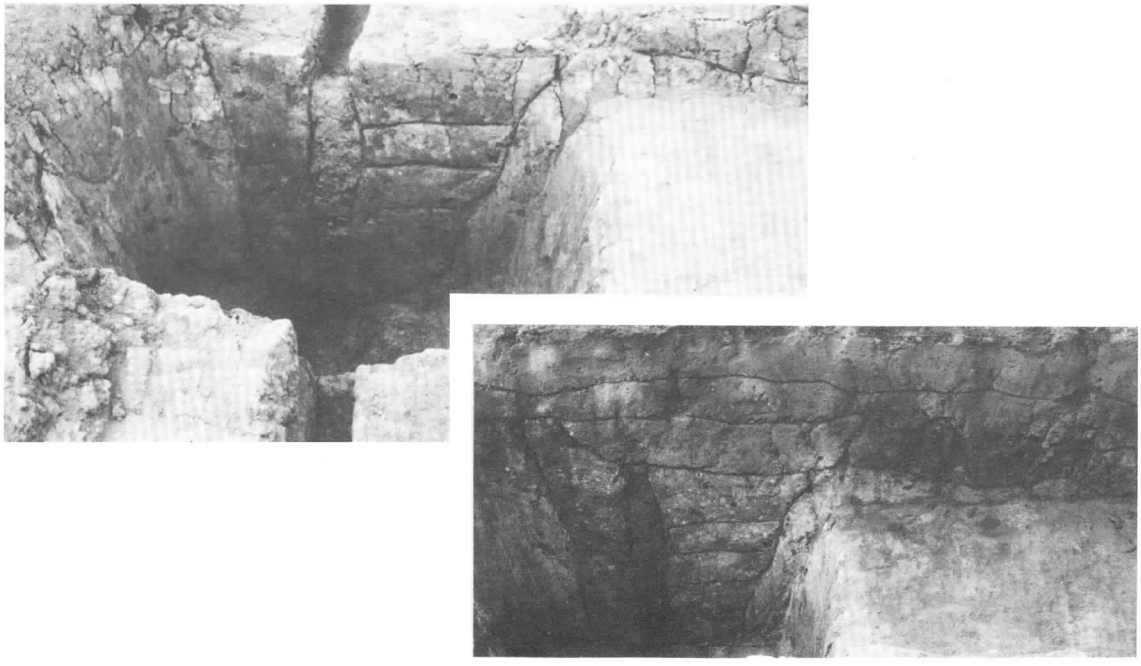
1　SB 310 基　壇　全　景（北東側より）



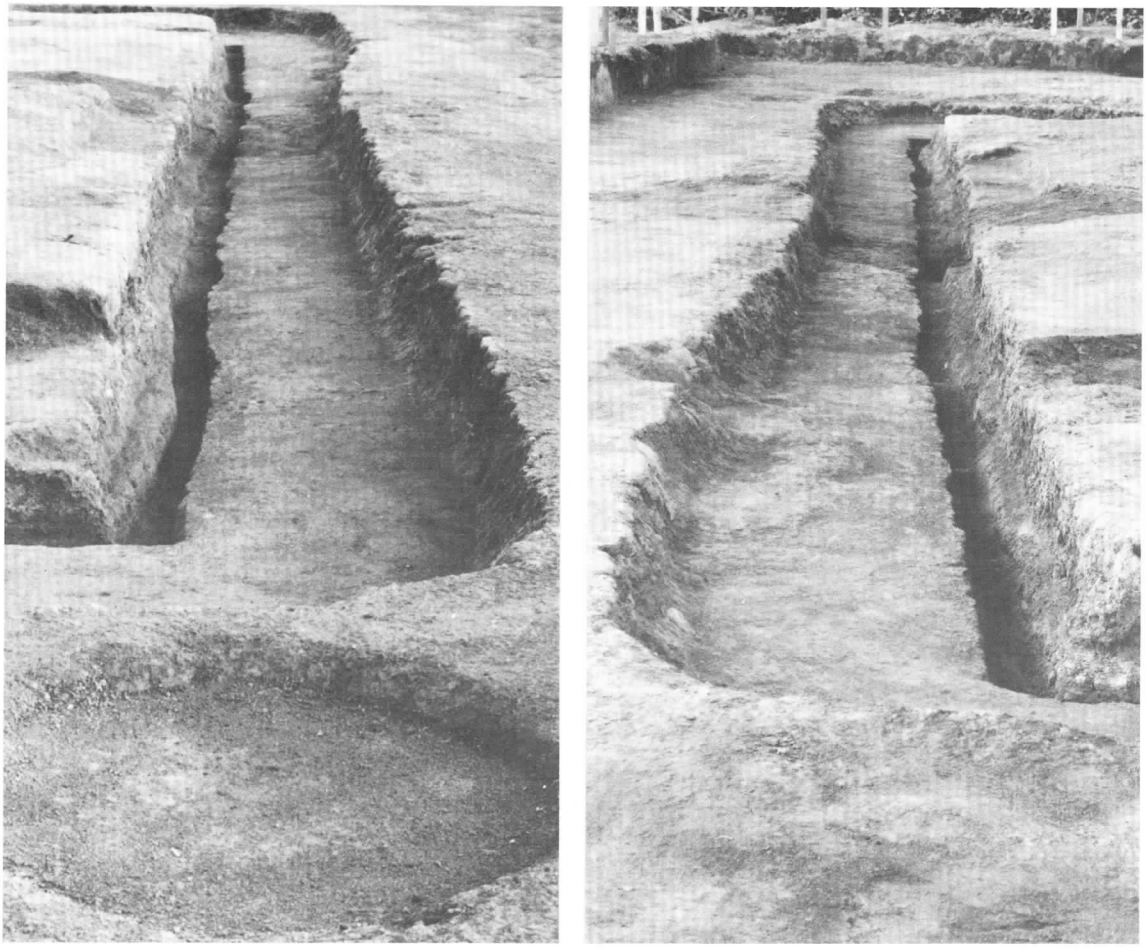
2　SB 310 基　壇　全　景（南西側より）



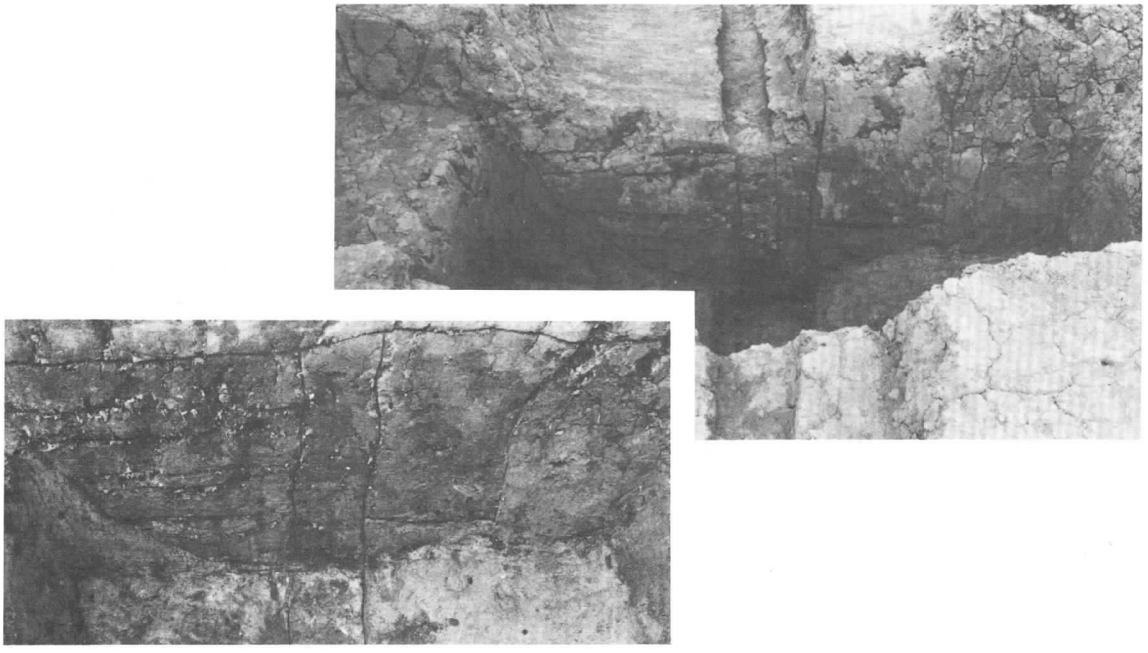
1　ＳＢ310・基 壇 東 辺 （左・南側より，右・北側より）



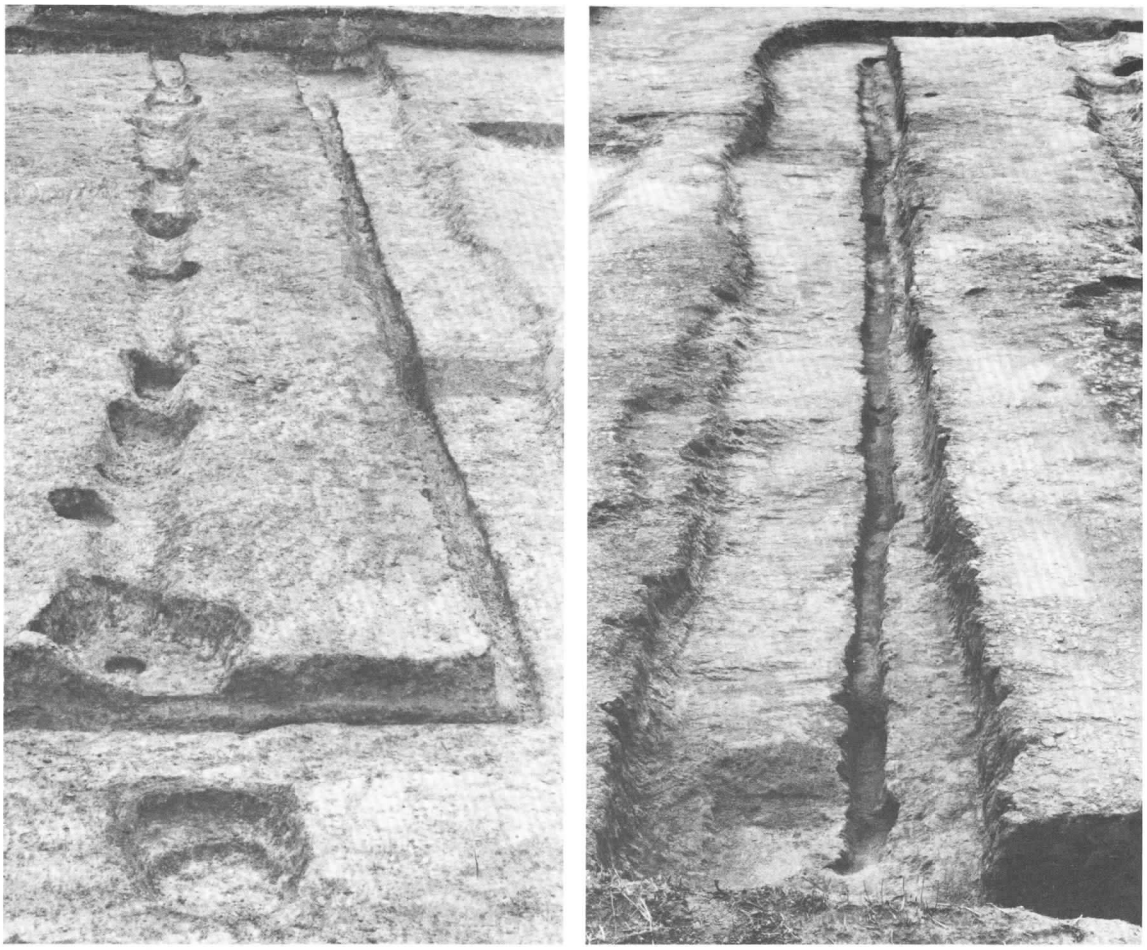
2　基壇北辺部土層断面



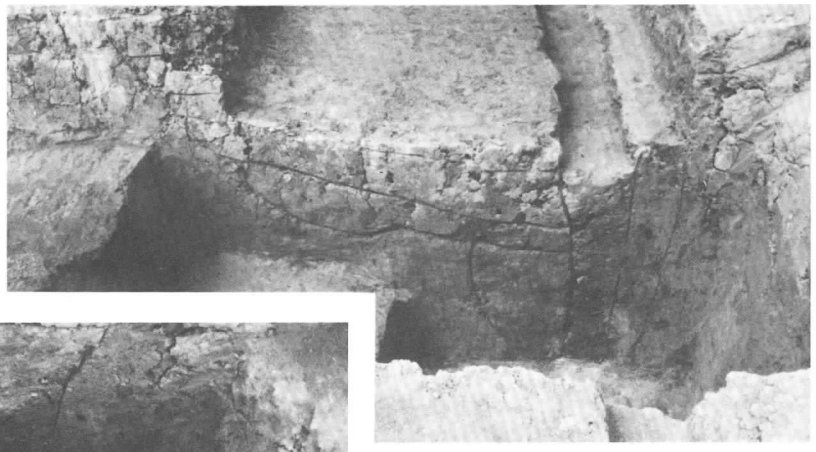
1　ＳＢ 310・基 壇 西 辺 （左・北側より，右・南側より）



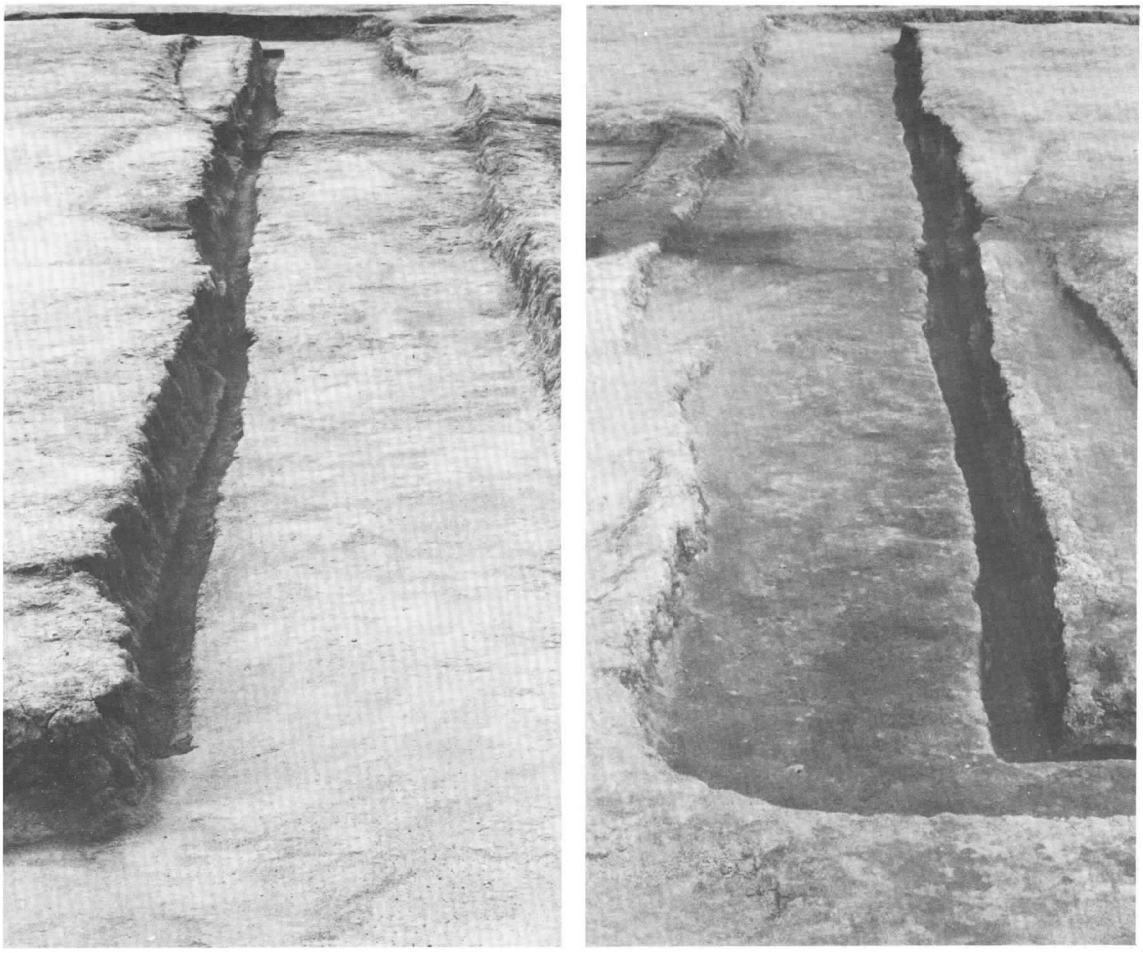
2　基壇西辺部土層断面



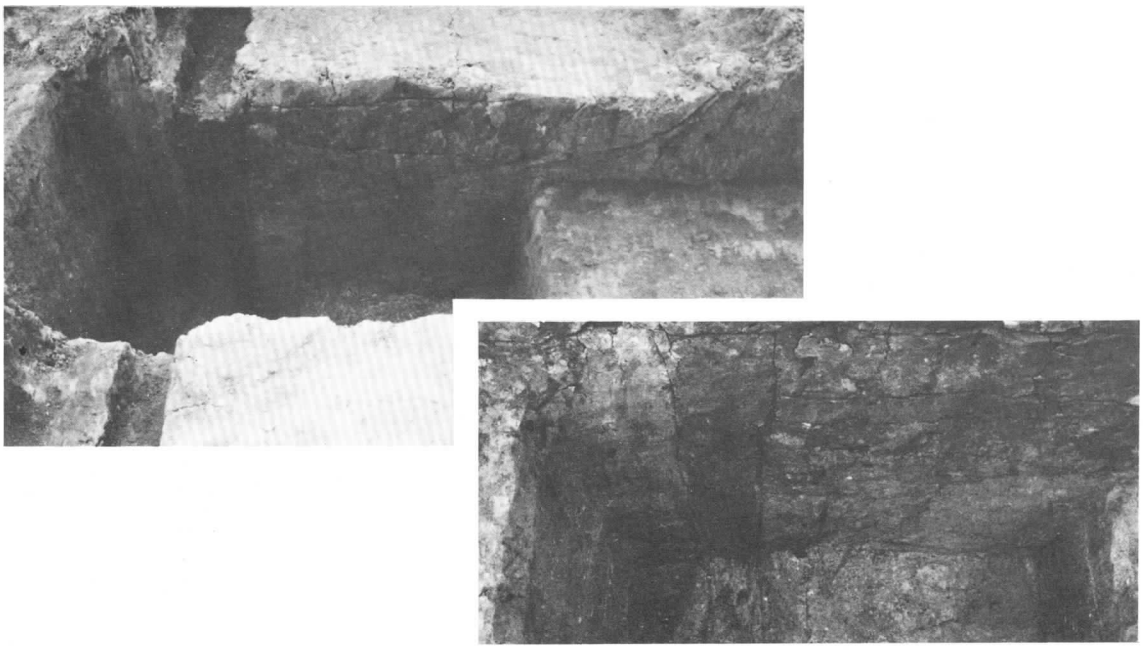
1　ＳＢ 310・基 壇 南 辺 （左・西側より，右・東側より）



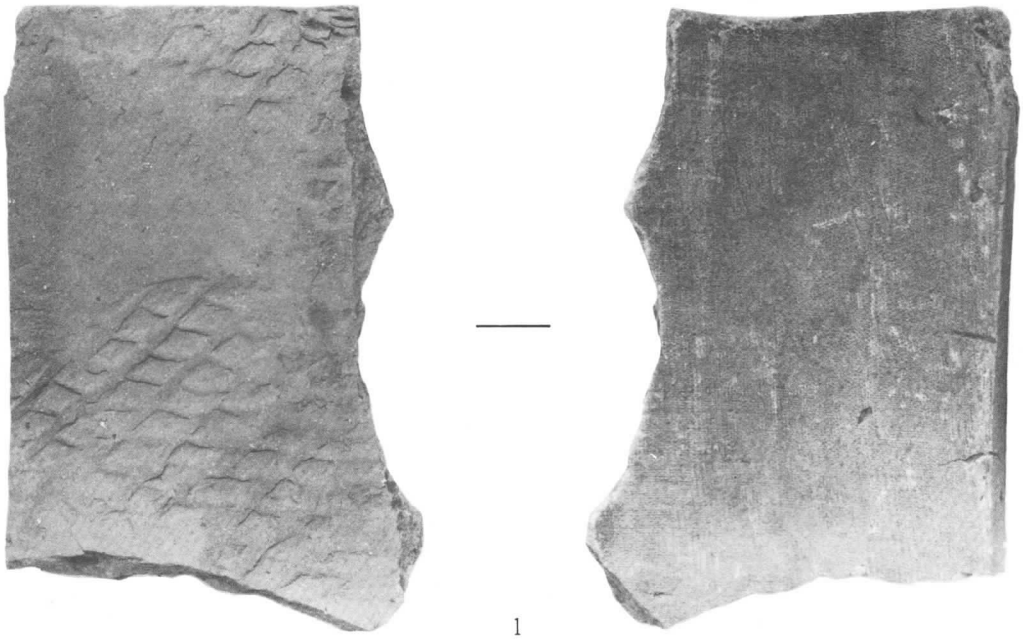
2　基壇南辺土層断面



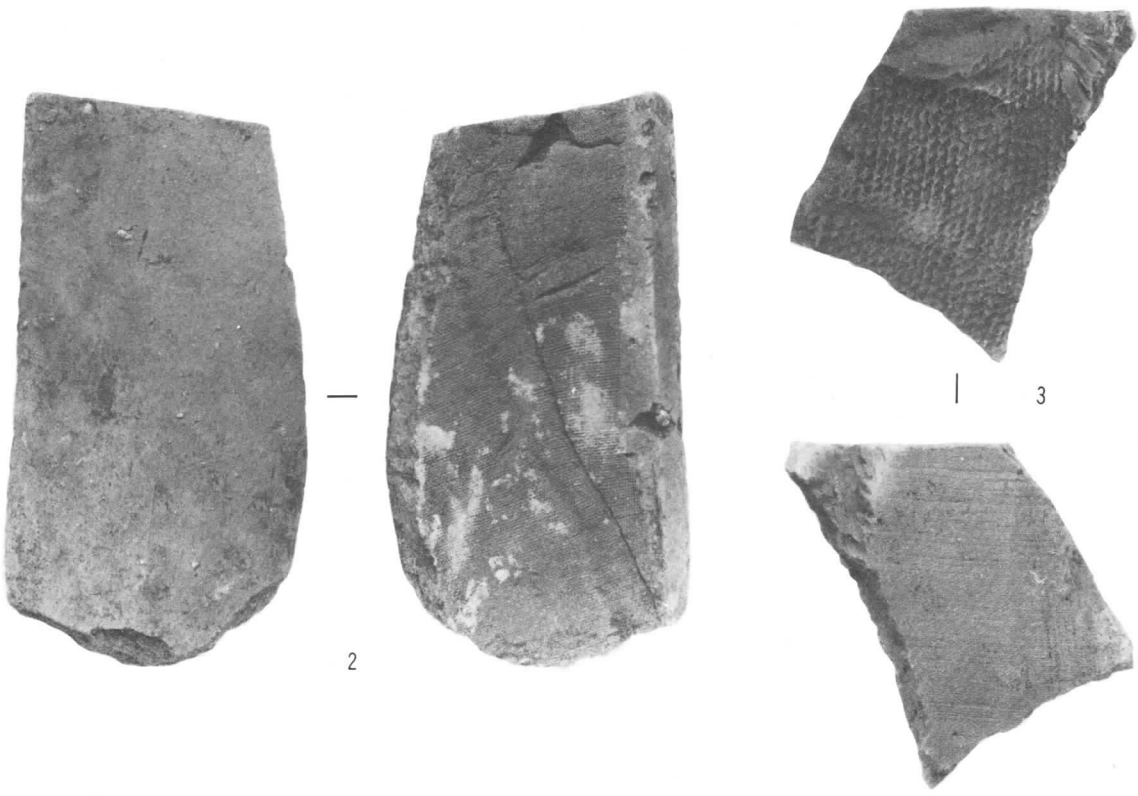
1　SB 310・基 壇 北 辺 （左・東側より，右・西側より）



2　基壇東辺部土層断面



1



2

3

平　瓦（1，3）　丸　瓦（2）

横滝山廃寺跡発掘調査概報

——第 4 次 調 査——

昭和60年 3 月31日

発 行　寺泊町教育委員会
新潟県三島郡寺泊町
印 刷　株式会社　柏屋印刷所
東京都新宿区早稲田鶴巻町506－5